

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2019 Sept.

第108号

調査
発掘
整理
紹介

南魚沼市坂之上遺跡・余川中道遺跡

催事紹介 2019年度 秋季企画展「海をわたったヒスイ」



坂之上遺跡 土器廃棄遺構 7月撮影



2019年度
発掘調査
遺跡の紹介

坂之上遺跡

—古墳時代の祭祀行為、土器集中を伴うピット群—

所在地：南魚沼市余川字坂之上

坂之上遺跡は、魚沼丘陵から魚野川へ流下する庄ノ又川によってつくられた扇状地上に立地する古墳時代中期～後期の遺跡です。国道17号六日町バイパス建設に伴う発掘調査を平成30年度から実施しています。ここでは今年度調査で確認された、祭祀行為の痕跡と考えられる土器集中を伴うピット群について紹介します。

出土した土器は高杯、甕などが長さ5m、幅1.5mの帯状に集中しており、口を上にして正位で置かれたものや伏せて置かれたもの、椀と甕を重ねて置いたものが確認できますので意図的に配置したことが明らかです。また、土器の周囲からは石製模造品や鉄器が見つかっていて、この状況は隣接する六日町藤塚遺跡でも確認されており、祭祀行為に伴うものと考えられます（埋文にいがた第101号参照）。さらに、この土器集中に近接した東側約10mの範囲では、200基を超えるピット群が見つっています。ピットの多くは柱穴と考えていますが、柱並びが不規則で、なかには斜めに

掘り込まれたものがあることから掘立柱建物に伴うものとは考えられません。ところで、このピット群と土器集中は集中域の方向、範囲が重複していることから一連の遺構と捉えるのが妥当と言えます。このピット群の性格については、一つの可能性として神籬（神を迎えるための依り代）として木柱を立てた跡ではないかと考えています。隣接する六日町藤塚遺跡同様、古墳時代の祭祀行為の可能性を示す例として注目されます。

この周辺地域は古墳時代中期から後期の集落や古墳群が点在します。県内屈指の初期群集墳である県指定史跡の飯綱山古墳群、蟻子山古墳群と余川中道遺跡、六日町藤塚遺跡といった古墳群とほぼ対応する時期の集落・生産・祭祀遺跡の存在が確認できる県内でも稀有な地域です。

今後はこれまでの調査成果を統合することで、この地域の古墳時代の様子を明らかにしていくことが課題になります。（田中祐樹）



ピット群から八海山を望む



土器集中とピット群



椀と石製模造品



上空からみたピット群



2019年度
整理作業
から

峠を越えた「赤い土器」

下の二枚の写真は、2014年に発掘調査を行い、現在整理作業を行っている南魚沼市の余川中道遺跡から出土した古墳時代中期（5世紀後半頃）の「杯」と呼ばれる土器です。杯は食事の際に手に持って使うもので、現在の「お茶碗」にあたります。

写真1の杯は、器面は白っぽく、底部に厚みがあり丸みをおびた形をしています。余川中道遺跡ではよくみられるタイプで、地元産と言ってよいものです。

これに対して写真2の杯は、遺跡全体で数点しか出土していないもので、器面は赤く、薄く削られていて地元産のものよりシャープな印象を受けます。よく見ると、地元産の杯には土器を焼成したときの焼きムラである黒斑が残っていますが、写真2の杯にはありません。焼き方にも違いがあったのでしょうか。

また、顕微鏡で観察すると、地元産の杯とは粘土の素地に混ぜられた砂に含まれる鉱物の組成や粒の大きさにも違いがあることがわかりました。これらの点を考えあわせると写真2の杯はどこか別の場所で作られ、運ばれてきたと考えることができそうです。

実は、このような赤い土器は群馬県を中心に関東地方に分布することが知られています。今後、詳しく比較検討を行う必要がありますが、現状では余川中道遺跡の赤い土器は群馬県から運ばれた

可能性が高いと考えています。新潟県内では、南魚沼地域以外でこのような土器は確認できず、群馬県と境を接する地域性をあらわす土器と言えます。

群馬県から南魚沼地域へ入るには険しい山道を越えなければなりません。「ワレモノ」を携えて峠に挑んだ1,500年前の人々の心境はどのようなものだったのでしょうか。土器の移動は地域間の関係を示すとよく言われますが、峠を越えた赤い土器の背景には日常的な交流とは異なる特別な事情があったと思えません。

(小野本 敦)



遺跡の位置

(国土地理院基盤地図情報数値標高モデル)



写真1 地元産の土器 (口径13.8cm)



写真2 赤い土器 (口径13.1cm)



埋文 インフォ メーション

2019年度秋季企画展 海をわたったヒスイ

企画展「海をわたったヒスイ」は、新潟県が誇る日本の国石「ヒスイ」をテーマとしたものです。県内から出土した縄文～古墳時代のヒスイ製品のほか、特別に北海道・青森県・鹿児島県のものを新潟県で初公開しています。ここでは展示品を紹介しながらヒスイの歴史を辿ってみましょう。

糸魚川市の世界ユネスコジオパークには、小滝川流域と青海川流域の2か所のヒスイ産地があります。糸魚川市のヒスイは質・量とも日本一です。

糸魚川市大角地遺跡で見つかった約6,500年前の敲石は、世界最古のヒスイ製石器です。柏崎市大宮遺跡では約6,000年前の国内最古のヒスイ製加工品が、上越市和泉A遺跡では約5,500年前の県内最古のヒスイ製大珠が出土しています。約5,000年前になると、糸魚川市長ヶ原遺跡で鯉節の形に似たヒスイ製大珠が盛んに作られました。大珠は穴をあけた胸飾りで、火焰型土器が誕生した信濃川流域をはじめ、東日本一帯に流通しました。見附市耳取遺跡の鯉節形大珠は、ヒスイ製のものとしては県内最大です。長岡市岩野原遺跡では貴重なヒスイ製大珠がお墓から見つかっていますので、大珠はムラを代表するような人物の立場などを誇示するステータスシンボルであったと考えられています。約3,500年前になると、ヒスイ製勾玉などの小型品が流行します。胎内市野地遺跡のお墓では人の頭付近からヒスイ製丸玉が出土しました。

縄文時代、糸魚川地域のヒスイは青森県と北海道に大量に運ばれ、奥尻島でも見つかっています。大珠は丸い根付形が好まれましたが、どこで作られたか分かっていません。約3,000年前の青森県六ヶ所村上尾駈(1)遺跡では、墓に副葬された首飾りや勾玉が多数見つかっています。一方、鹿児島県にも糸魚川地域のヒスイが運ばれました。鉄砲伝来で有名な種子島の現和巢遺跡で見つかった大珠は、孔のあけ方や形が独特のものです。南さつま市上加世田遺跡の獣形勾玉や管玉は地元産の石を使った九州ブランドの玉で、新発田市青田

遺跡の平玉が国内最北の出土例です。

糸魚川地域の玉作りは弥生時代前期の大塚遺跡でいったん途絶えます。県内では弥生時代中期後半に長岡市大武遺跡などでヒスイ製勾玉が再び作られ始めます。その多くは信州や東北地方との交易品として利用されました。古墳時代にヒスイ製勾玉は権威を示す役割を果たします。胎内市城の山古墳の全長約8mの舟形木棺には、質の高いヒスイ製勾玉が副葬されました。ヒスイ製勾玉作りは古墳時代後期に終焉を迎えます。一方で、滑石製の鏡・剣・勾玉などを模した石製模造品が作られ、祭祀に使われました。やがてヒスイそのものが忘れ去られます。ヒスイが糸魚川市小滝川で再発見されたのは昭和13年のことです。(荒川隆史)

- ◆ 期 日：令和元年12月8日(日)まで
- ◆ 会 場：新潟県埋蔵文化財センター
- ◆ 観覧料：無料



「海をわたったヒスイ」のおもな展示品



埋文
コラム

せきぞく
石鏃について

縄文時代の人々は、獣や魚、木の実など自然の恵みを食料としており、シカやイノシシなどの狩猟では弓矢が使用されました。そして、矢の効果を高めるため、その先端に取り付けられた先の尖った石器が石鏃です。

石鏃が登場するのは今から約1万5千年前で、縄文時代のはじまりの頃にあたります。このことから、弓矢の発明は旧石器時代から縄文時代への移りかわりと関わる重要な技術革新と考えられてきました。実際、縄文時代草創期を代表する阿賀町小瀬ヶ沢洞窟では大量の石鏃が出土しています(写真1)。このように、縄文時代をつうじて、さまざまな形の石鏃が大量に作られたことから、石鏃は縄文時代の代表的な石器とされています。

石鏃には茎のある有茎鏃(写真1：中段)となし無茎鏃(写真1：下段)とがあります。さらに、身ごろの「かえし」や側縁の形など、いろいろな形の石鏃が作られました。このような石鏃の形には、時代や地域ごとのまとまりがあり、石鏃を矢柄に固定するやり方を反映するとともに、製作した人の集団を示すなどの意味があった可能性があります。

石鏃が矢尻として使用されたことは、根元に接着剤であるアスファルトが付着して出土した事例などの証拠があります(写真2)。また、一部は

ぎょうろう もりさき
漁撈用の銚先などとして使用されたと考えられています。石鏃は縄文時代における狩猟活動の主役であり、その材料にはこくようせき けいしつけつがん
黒曜石や珪質頁岩など、硬くて緻密な良質の岩石が使用されました。



写真2
アスファルト付着石鏃
青田遺跡出土(縄文時代晩期)

弥生時代の石鏃は、縄文時代の伝統を受け継ぎながら、中期頃まで盛んに作られました(写真3)。そして、縄文時代より大型化することから、戦争で用いられた武器と考えられたりもしました。しかし、新潟県内には当時の集団間の紛争の証拠はなく、他の理由を考える必要があります。新潟県域で鉄器が使用されるようになった弥生時代後期には、遺跡から出土する石器の数は激減しますが、石鏃は一定数作られ続けました。石鏃は、縄文時代と弥生時代をつうじて実に1万3千年以上もの間、作られ続けたのです。(沢田 敦)



写真1 小瀬ヶ沢洞窟出土石鏃
所蔵・写真 新潟県長岡市教育委員会



写真3 大武遺跡出土石鏃(弥生時代)



県内の
遺跡・遺物
106

にいつゆでんかなづこうじょうあと
新津油田金津鉦場跡

指定年月日：平成30年10月15日

所在地：新潟市秋葉区金津字居村

新津油田は明治7（1874）年から平成8（1996）年までの122年間にわたり操業されました。新津油田とは新津丘陵とその付近に分布する出油地帯の総称で、幅約6km、延長約16kmの広い範囲にわたります。新津丘陵は主に新潟市と田上町・五泉市にまたがる標高300m以下の起伏の小さい山地・丘陵地帯のことで加茂川を南限としています。

今回の指定地である金津鉦場跡は、新津油田の南西側に位置し、油田遺構や石油関連施設が最も集中して残る地域です。

石油を含む層を油層、または貯留層と言います。新津丘陵の主な油層は、金津層（新潟県柏崎市の西山油田の椎谷層に相当）という砂岩と泥岩が互層になって堆積している層です。この砂岩層が貯留層となっています。泥岩層が貯留層をパックするような役割を果たしており、この泥岩のことを帽岩と言います。秋葉区の新津一ノ沢に露頭している状況が確認できます。

記録に残る新津油田の石油生産は、江戸時代初期に真柄家が新発田藩の許可を得て採油を開始しているようです。江戸時代後期の文化元（1804）年には、金津村で中野家が採掘権を取得し採油を行っていました。

新津油田の金津鉦場は、明治6（1873）年の「日本坑法」公布後に金津村出身の中野貫一が採掘権を得て明治7年に操業を開始しました。採油当初

は手掘りでした。その後様々な困難を乗り越え、明治20年代後半からは「上総掘り」という井戸掘り技術を利用した掘削を開始し生産量が増加します。明治36（1903）年には綱式機械掘りを開始し、次々に採掘に成功していきます。新津油田全体としての原油採掘量は明治38（1905）年頃から大正14（1925）年位にピークを迎えますが、以降は減産していきます。金津鉦場では原油採掘をメインとし精製はあまりやっていませんが採掘された原油は、明治時代は主に灯油として、大正時代以降はガソリンや重油として利用されたようです。

金津鉦場を含む新津油田が達成した原油累計生産量302万2千キロリットルは、第2次世界大戦以前に開発された油田としては、秋田県の八橋油田に次いで国内第2位であり、操業期間の長さでは国内に類例がありません。

現在金津鉦場跡には上総掘り井戸11基・機械掘り井戸13基の油井遺構のほか、動力源であるポンピングパワー・継転機・集油所・送油所・各種タンク・加熱炉・濾過池・木工所など採油から精製までの一連のシステムが良好に残っています。これらのことが近代の石油産業の発展を知る上で重要な遺跡であるとして、78,639㎡が史跡に指定されました。見学については新潟市秋葉区のホームページから「石油の里」をご検索ください。

（新潟市文化スポーツ部歴史文化課 朝岡政康）



写真1 金津層の露頭
黒く見える砂岩層に石油を含みます



写真2 C39号綱式機械掘り石油井戸
操業期間：M42（1909）年～H8（1996）年



埋文にいがた 第108号 令和元年9月28日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL：(0250)25-3981 FAX：(0250)25-3986

E-mail：niigata@maibun.net URL：http://www.maibun.net/



『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。上の URL からご確認ください。